

安全・安心で快適な暮らしの実現を目指して

K-Ship

九州を語ろう
ケイ・シップ

Vol.2
2008

[無料 FREE]

～人口減少・少子高齢化で変わる暮らし～

地域力で 勝負!!



福岡国際マラソン2008
名島橋(国道3号:福岡市)



CLOSE UP INTERVIEW

マラソンランナー 宗茂さんが語る 「マラソンから地域活性化へ」

生

活

起

点

丸野香代子さん

「女性の働き方 — 仕事と家族」

地域力で勝負

～人口減少・少子高齢化で変わる暮らし～

日本は、2004年をピークに世界の先進国でいち早く人口減少時代に突入しました。九州では、一足早く2000年の1,345万人(国勢調査)をピークに人口減少は始まっています。また、年齢構成の面では少子高齢化が進んでいます。

人口減少により、都市部においてもニュータウンの急激な高齢化、独居老人の増加、地方都市における中心市街地の空洞化といった問題も生じています。また、条件不利地域(中山間地域、島嶼、半島)では集落の機能の低下といった問題が危惧されています。

そんな中でも、人口減少・少子高齢化に負けず、元気に暮らしているまちが多くあります。長寿社会というのは、満たされた社会の人間の願望であったはずであり、そこに老後の暮らしの豊かさがあるはずです。

人口減少・少子高齢化の中で、都市や農山漁村地域はどのような対応をしていかなければならないのか。

自立した地域づくりの成否の鍵、私たちはそれを「地域力」と考えています。

平成20年12月

Contents

Q	CLOSE UP INTERVIEW	
	マラソンランナー 宗茂 さんが語る	01
	「マラソンから地域活性化へ」	

生	活	起	点	丸野 香代子さん	
				「女性の働き方 — 仕事と家族」	04

地域力で勝負	06
--------	----

～人口減少・少子高齢化で変わる暮らし～

【基調報告】 山口県立大学大学院 小川 全夫 教授	
“九州は、高齢者が生き生きと「第2の人生ドラマを演じる舞台」”	06
【解説】 九州の人口減少と少子高齢化	08
佐世保市～子どもからお年寄りまで、生活者に根ざしたまちづくりを实践	12
諸塚村～住民の“自治力”と交流で地域を豊かに	14
九州近未来とインフラ	16

データ・用語集	18
九州の中の風景	20



九州で生まれ育った元五輪マラソン選手の宗茂さん(現在宮崎県延岡市在住)に、学生時代の思い出話を交えながら、アスリートを育む九州の風土についてお話を伺った。

マラソンランナー 宗茂さんが語る 「マラソンから地域活性化へ」

小4のマラソン大会優勝が「走り」の原点

——宗さんの子どもの頃についてお聞かせ下さい。

生まれは大分県白杵市、JR上白杵駅側の高台にある福良ヶ丘小学校に通っていました。幼い頃は、小学校周辺の山や、古い町並みが残る二王座(におぎ)でよく遊んでいました。城下町で道が狭くなっていますが、幼い頃はその道が狭いとは思いませんでした。今帰ってみると、よくこんな狭い道を車が通るなと思うくらい、白杵の道は狭いと思います。

当時の白杵川は工場排水で汚れていたため、自宅から1.5km離れた支流までフナやコイを捕りに出

かけていましたが、今の白杵川はとても綺麗になっていて驚いています。幼い頃はスポーツ自体にあまり興味がなかったのですが、白杵の豊かな自然の中をあちこち駆け回って遊んでいたのがよかったのかもしれません。

——意外にも体育はあまり得意ではなかったそうですね。

スポーツ音痴で、球技や器械体操は苦手でした。短距離も早くはなく、兄弟二人ともリレーの選手に選ばれたことは一度もありませんでした。ところが小4のマラソン大会で、クラスで一番スポーツ万能の友人に勝ったのです。それが嬉しくて、自分には長距離が向いていると思い、中学に入つてすぐに陸上部に入りました。



二王座(白杵市)の街並み



ゴールデンゲームズ in 延岡

——どんな大会に憧れていましたか？

私たち兄弟が一番憧れていた大会は、地元の小・中学校の前をランナーが走る県内一周駅伝でした。みんなが応援してくれる白柵の町中を颯爽と走るのが、とてもかっこよかったです。参加資格は高校生以上だったので、人数が足りない場合は中3からでも参加できるとのことと、中2の時からこっそり「中3」で登録して参加していました。だから、宗兄弟は「中3」で連続出場したことになりますね(笑)。

——高校時代はどんな競技生活を送っていましたか？

中学時代は陸上部に長距離の指導者がいなかったため、強制されることなく、ただ自分たちが目標とする試合に向かって自由に走れたこと、佐伯で過ごした高校3年間は、良き指導者の下で、走ることにひたすら没頭できたことです。

高校時代、全国高校駅伝を目標としていました。高校3年の時に県大会で優勝して全国大会に出場することができ、8位に入賞しました。7区間あるのにメンバーはギリギリ7人しかおらず、皆自分の走る区間が決まっていたので、いい悪いは別にして、チーム内の争いがなく、みんなが力を出し切ることができたのだと思います。

自分の街を

憧れのランナーが走る

——ランナーを育む九州のよさとは？

九州のよいところは、「県内一周駅伝」と「九州一周駅伝」があることですね。「県内一周駅伝」は、「九州一周駅伝」に向けて県代表のチームを組むという目的で、競技が盛んになっていくわけです。

本当は「九州一周駅伝」というのは、全国レベルの選手にとっては必要のない大会なのかもしれませんが、これから伸びていくとする選手にとって必要な大会なのです。この駅伝で走っていた選手達が引退した時に、今度は地元の役場に入って小中学生を指導する立場になり、また新たな選手を育てていくようになるのです。「県内一周駅伝」「九州一周駅伝」を通して、次世代の若い子を育成する人が育つていく、これが九州の強さだと思います。

——子どもの頃に地元の駅伝を間近に見たのがきっかけで選手になった人も多いでしょう。

そういう人が多いですね。県内、九州内、様々な学校の前を駅伝は通ります。子どもの頃寒期中、学校の前や国道沿いに出てみんなで駅伝を応援したこと、駅伝選手たちの走っている姿というのは、一生記憶に残るでしょう。しかし残念なことに、最近では時間がもったいないからという理由で、駅伝が学校の前を走っても、応援に行かせない学校も増えてきました。



市民とランナーの一体感が 地域を元気に

延岡市は、多くの世界的アスリートを育て送り出してきた特徴を生かし、「アスリートタウン」づくりを行っている。市内7カ所にジヨギングコースが設置され、道路脇には「ランナーに注意」といった旗や距離表示もある。市民のスポーツに対する関心も高く、街をあげて行っている「ゴールデンゲームズ in 延岡」は、メインイベントである。

——「ゴールデンゲームズ in 延岡」についてお聞かせ下さい

この大会は来年で20周年を迎えます。最初は人を集めるつもりはなくて、旭化成のレーヨングラウンドの改修記念として始めました。ナイターで行ったため、コンディションが良く、参加した人の約7割が自己記録を更新したのです。一回限りの「改修記念」記録会だったはずが、要望が多く、翌年、翌々年も「改修記念」として3回くらいやりました(笑)。

——ゴールデンゲームズの一歩の魅力は何ですか？

何と言っても、観客がトラックのすぐ側で観戦できることです。初めて来た人は鳥肌が立つくらい興奮すると言います。選手と観衆あつての大会ですので、いかに選手と観衆の距離を近づけるか、いかに観衆を飽きさせないか、いろいろと考えながらやってきました。

——観客を飽きさせないように、どんな工夫をしていたのですか？

たとえば、選手たちをより注目してもらうために、全選手の自己最高タイムや大会の歴史の載ったプログラムを作りました。また、レースとレースの間の数分間で前のレースの表彰式をやり、間延びしないような工夫もしています。選手と観客をつなぐ実況中継も、観客を飽きさせないよう心がけています。

——アクセスが便利でない延岡に多くの人が集まるのはすごいですね。

延岡は九州で最もアクセスが悪いので、他の競技大会を行ってもあまり人が集まりません。なぜ、「ゴールデンゲームズ」にはこれほど人が集まるのか？ それは、大会を市民に定着させ、人を集めるための様々な工夫をし、市民と協力して運営してきたからだと思います。大会当日の交通整理などは、市民ボランティアの力が欠かせません。

町づくりにおいても、同じことが言えるのではないのでしょうか。ただ箱物のレジャー施設を作る

だけでは駄目で、いかに人を呼び込むか、一度来た人がまた来たくなる様な工夫をし続けることが、地域活性化には必要なのだと思います。

豊かな自然が九州の魅力

——宗さんにとって九州の魅力は何ですか？

やはり自然が多いことですね。私は年に何回か仲間と一緒に山登りをしています。早く駆け登るのも爽快ですが、ゆっくりみんなのペースに合わせて登るのも、また違った良さがあります。

自然の中で深呼吸をしていると、体の中のたまった悪いものが全て抜けていき、自然の中の良い「気」を取り込むことが出来ます。競技人だけでなく、人間にとつて、自然が多いことは良いことだと思います。



宗 茂さん

プロフィール

1953年、大分県生まれ／大分県佐伯豊南高校卒業。モントリオール、モスクワ(日本不参加)、ロサンゼルスでの3度のオリンピックにマラソン日本代表として選出される。ほか、多くの国際大会で入賞をはずす。元旭化成陸上部監督。

「女性の働き方―仕事と家族」

(株)談代表取締役社長
丸野香代子さん

5人の子どもを育てながら起業し、多方面で活躍されている(株)談の丸野香代子社長に、育児と仕事を両立させる秘訣などについて話を聞いた。

できることから、焦らず起業へ

――育児をしながら、なぜ起業しようと思ったのですか？

私の学生時代の夢は、「仕事を普通にやること」と「家庭を普通に持つこと」の2つでした。しかし、まだ男女雇用機会均等法以前の時代で、女子学生にとっては就職難でした。就職に失敗し、2つの夢のうち、「結婚」のほうを先にしました。

一人目の子どもの時は子育てに夢中でしたが、二人目の子どもが生まれた頃から様々な地域活動をするようになり、仕事せずにいることに我慢できなくなりました。

そこで新聞の求人欄を見て履歴書を30通ばかり送ったのですが、そのうち28通が送り返されてきてしまいました。

当時は履歴書に「家族欄」というのがあったせいか、子育て中の女性というのは、求職者として条件が悪かったみたいです。

――では、何が仕事につながったのですか？

それでも仕事がしたいという気持ちは抑えきれず、どこも雇ってくれないのなら、まずは自分のできることから焦らずやってみようと思いました。

当時、子育てをしながらいろいろと思うことがあったので、子育て中の主婦仲間10人と一緒に「なぜパート募集には35歳位迄と書いてあるのか?」「どのティッシュペーパーが使いやすいのか?」といった主婦の視点から、「ミニコミ誌『オムニバス』」を作り始めました。

最初は趣味程度に始めたのですが、取材・編集・販売までの一連の雑誌づくりを経験でき、今の仕事の土台にもなっています。

――お仕事は順調でしたか？

ある時、創刊されたばかりの広報誌を目にして、こういう仕事をうちで継続して請け負いたいと考えました。

当時は大分自信がついてきたので、「うちは編集をやっているグループなのですが、何かお手伝いできることはありませんか?」と訊ねたところ、「会社さんですか?」と聞かれ、結局「会社組織にしてからまた来てください」と言われてしまいました。

その時は本当に悔しかったのですが、会社組織にしないとこういうところからは仕事がもらえないんだということがわかりました。編集プログラムクションとして法人化したのは、それがきっかけですね。



3人目からは 上の子たちが 下の子の面倒をみる

――どのように仕事と子育てを両立させていたのですか？

会社を始めた頃はとても忙しくて、夜遅く帰

宅するとおむつの山で、家事をしていたら睡眠時間は1日3時間！とても続けられない状況になりました。そこで夫が「家政婦さんをお願いしたら？」と提案してくれました。

とはいっても、当時社長である私でも月給と保育料や家政婦さんへの支払いを考えたら、本当は私が働かないほうが家計が助かるんじゃないかと思いました。

しかし夫は「長い目で見たら家政婦さんが必要な時期というのはそんなに長くはないはず。今この仕事の波をつかまないでどうするの？借金してでも将来の自分への投資と思えばいいじゃないか」と後押しをしてくれたのです。

その言葉が支えになって、仕事を続けることができました。あの時仕事をやめていたら、今の自分や会社はなかったと思います。

—— **お子さんが増えて、家事は大変ではなかったですか？**

子育ては2人目までは大変ですが、3人目から絶対楽になる。これが私の持論です。みなさん、一番きつい2人目までで産むのをおやめになる方が多いですが、3人以上産めば、上の子たちが下の子の面倒を見てくださいから。うちは、長女と次女が弟たちの面倒を見てくれていました。友達と遊ぶ時も、弟をおんぶしてゴム飛びをしたり、友達に「おむつかえしたことある？」と言って手伝わせたりもしていたようです。

—— **仕事にも家庭にも、とても前向きですね。**

私は子どもたちに「あなたたちを食べさせるために働いている」と言ったことや思ったことはありません。「あなたたちがピアノやサッカーをしたいのと同じように、お母さんは仕事をしたいの。あなたたちがしたいことには協力するから、お母さんにも仕事をさせてね。」と言っていました。もちろん5人の子どもを食べさせなければならぬですから、家計のために働いているのですが、それ以上に、「やりたいことをやらせてもらっている」という意識でした。

会社を起こして仕事メインになると、仕事の合間に子どもたちを引き寄せて家族との時間を積極的に作っていました。その時のほうが、子どもたちは「愛されている」と感じていたようです。平日はみんなバラバラにご飯を食べているので、休みの日は必ず家族揃ってご飯を食べたり、旅行に行ったりしています。

九州の魅力は食と水。 そしてアジア交流、 おじいちゃん、おばあちゃんが 子育ての手伝いを

—— **丸野さんにとって九州の魅力は何ですか。**

九州の魅力は、何と言っても食と水。特に熊本は水がとてもおいしくて豊富ですね。私も子どもたちとよく川に行つて魚を採ったり、水辺で食事したりしていました。白川もとても素敵ですし、親水空間のある都市はとも魅力的だと思います。熊本は、水を使った都市戦略をたてるべきなのではないでしょうか。

仕事の面では、九州はアジアに近いという良さを活かして、東アジアをパートナーにした仕事を考えています。当社も、少子高齢化していく日本社会を支えるために、人材育成関連の会社を上海に開設しました。これからの日本と中国、韓国との交流は、九州が先頭をきつて担っていくべきだと思います。

中国では、おじいちゃん、おばあちゃんが子育てを手伝っているようです。日本の場合、現役で働くおじいちゃん、おばあちゃんに、孫の面倒をみるための特別休暇みたいなものがあってもいいのではないのでしょうか。



丸野 香代子さん

プロフィール

1956年、熊本生まれ／京都大学経済学部卒業。特定非営利活動法人NPOユニバーサルデザインセンターくまもと理事、熊本県観光連盟理事、熊本県キャリアアップ推進協議会委員、ロアツソ熊本特株会理事、熊本大学経営協議会学外委員等。

九州は、高齢者が生き生きと「第2の人生ドラマを演じる舞台」

九州大学名誉教授
アジア・エイジング・ビジネスセンター理事
山口県立大学大学院教授

小川 全夫 さん



口301人が住む鹿児島県鹿屋市申良町柳谷集落、地元の呼び名で「やねだん」の高齢者の元気な姿を伝えて衝撃を与えた。65歳を越えた公民館長のアイデアで、80歳、90歳を越えた高齢者がサツマイモを栽培し、芋焼酎「やねだん」の受注生産をはじめ、全国から注文がくる人気銘柄に仕上げたというのである。最初の売り上げ余剰金はボーナスとして住民に1万円ずつ分配しただけでなく、二度目の余剰金が出たときには、足腰の弱った高齢者のために手押し車を貸し出す事業費に使うことを決めたというのだから、頭が下がる。公民館では元教員が子供たちの勉強を教えている。そんな柳谷集落には、Uターン・イタターの家族が転入して、人口が増え、子供が生まれている。

日本の人口構造は少子高齢化に歯止めがかからない。そしてついに人口減少局面に突入した。そんな中、これまで国土の隅々まで展開していた集落が、小規模・高齢化して、その持続・再生が政策課題になっている。九州では、世帯数20戸未満、65歳以上人口70%以上となった集落が250を数えるという。

しかし、だからといって九州の集落が消滅すると思えるのは筋違いである。西日本新聞が連載した「やねだんの春」は、現在約110世帯、人

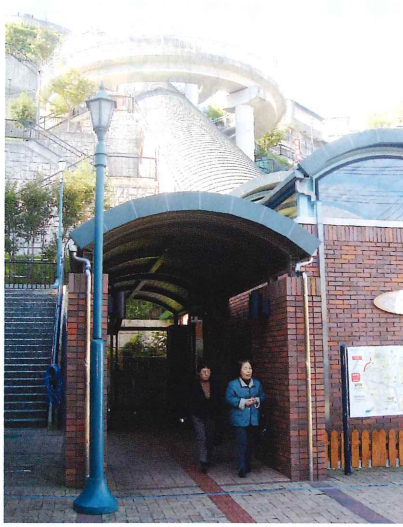
大分県竹田市九重野地区では、住民の半数以上が高齢化した7集落111戸が一緒になつて集落協定を結び、「谷ごと農場」といわれる広域的で多角的な地域営農を展開している。そして全国各地から2000人以上の視察を迎え入れているが、ここで注目されているのは高齢者が主人公であるということである。青大豆でつくる豆腐が人気商品である農産加工所「みらい香房若葉」で働く女性たちはみな高齢者だ。夜半過ぎから起きて働く女性をみると、「寝たきり」という決まり文句は、むしろ若者につけたくなる

ぐらゐの働きぶりである。また竹田市の町場では秋に「竹楽」という竹灯籠で町をライトアップするイベントが開かれるが、この竹灯籠を3つ束ねて倒れないようにする作業を担っているのは、老人クラブの方々である。

農村や地方都市だけでなく、人口の少子高齢化は中心都市や大都市内部でも進んでいる。長崎市や北九州市八幡東区のような傾斜地の多い町では、高齢者の移動のための工夫をして屋外エスカレーターまで設置されている。福岡市のように一見若い都市でも、詳細に小地域を調べてみると、高齢者しか残っていない住宅団地があったり、高齢者が集まってくる町があったりする。高

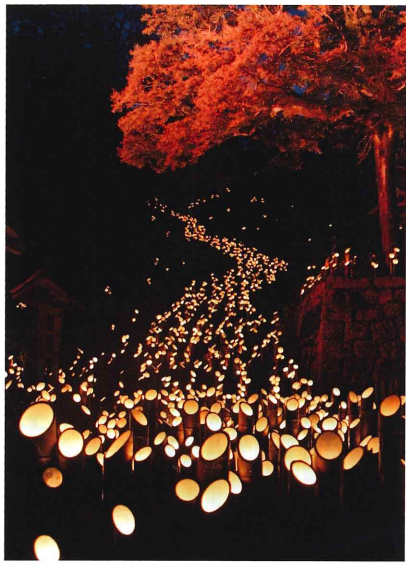


柳谷の風景と高齢者がつくる人気の芋焼酎「やねだん」のモニュメント（鹿児島県鹿屋市）



傾斜地に住む高齢者の足となる斜面エレベーター（長崎市）

高齢者だけでなく誰にでも使い勝手のよいユニバーサルデザインはこれからのまちづくりの基本である。高齢者が単に各種サービスの受け手としてしか登場しないというのであれば、高齢化コストがかかっても都市の力が弱まるという評価になるかもしれない。しかし、高齢者が持てる力を發揮する「生涯現役社会づくり」を推進すれば、まだまだ活力が高まる未来の都市像が浮かび上がらせることは可能である。退職後の高齢者が集まる都市の一つが別府市であるが、そこでは培った技術や知識を活かして、まちづくりや新しく移り住んでくる人々の住宅相談にのるといった活動を展開し始めている。福岡市では、高齢者福祉施設を拠点にして、近辺の高齢者が集まって、地域環境美化活動をしているケースもある。



【竹楽】地元の竹を利用したイベント。高齢者の技が活かされている。（大分県竹田市）

は平均寿命の短い外国からみれば、信じられないことであろう。これからもますます高齢者の暮らしが照らし出されることは間違いないだろう。要は、これからの少子高齢化と人口減少という変化は、外国からの移住者を大量に受入でもない限り歯止めはかからない時代になっているということである。したがって、当面は、まだま



小川 全夫さん

プロフィール

1943年、台北市生まれ／九州大学大学院文学研究科修士課程修了。久留米大学論文博士（文学）号取得。九州大学名誉教授、アジア・エイジング・ビジネスセンター理事、山口県立大学大学院教授。

だ元気な高齢者が増えていくという現実に即して、地域社会を高齢者の「第2の人生ドラマを演じる舞台」として基盤を整備し、各種の高齢者活力支援プログラム（出し物）を開発することが急務である。

福岡市に特定非営利活動法人のアジアン・エイジング・ビジネスセンターが設立されているが、ここでは日本における少子高齢化の先進的な取り組み（グッド・プラクティス）を、これから少子高齢化が進む東アジアに伝えるという使命を果たそうとしている。今は韓国版介護保険制度も始まったので、ここを通して、多くの韓国から視察実習生がやってきている。今後は、高齢者ががんばって暮らしている九州の農村や都市を学びに、多くの外国人が視察にやって来る時代になると予想されるのである。

九州の人口減少と少子高齢化を直視する

◆2000年から人口減少に入った九州

九州の総人口は2000年にピークを迎え、全国よりも一足早く減少に転じ、2005年では1335万人となっています。

九州の総人口の推移を見ると、1955年に一度ピークを迎え、その後の高度成長時代には、職を求める若年層を中心に大都市圏への膨大な人口流出によって、1970年には1207万人まで減少しました。しかしその後は再び増加基調に転じ、バブル時代には人口流出を経験するも2000年まで順調に増加してきました。しかしながら、既に人口は減少に転じ、これからは本格的な人口減少社会を迎えることとなります。

将来人口推計では、2030年には1123万人となり、2005年より約15%（約212万人）減少すると見込まれています。（図表1）

◆全国平均よりも高い九州の合計特殊出生率

人口減少が進む背景には、生まれる子供の数の大幅な減少、つまり出生率の低下が大きな要因となっています。女性が一生の間に生む子供の数を示す合計特殊出生率（※1）をみると、年々低下しています。

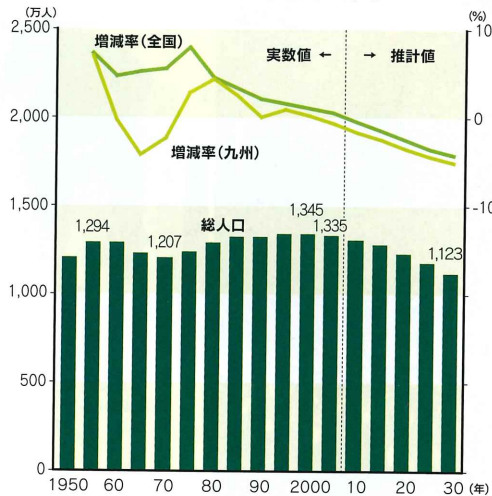
そうした中であって、九州各県では出生率自体は低下しているものの、福岡県を除いて全国平均よりも高い数値を示しています。（図表2）

〈図表2〉合計特殊出生率の推移

	1950	60	70	80	90	2000	05年
全 国	3.64	2.02	2.08	1.75	1.52	1.37	1.27
福 岡 県	3.91	1.92	1.95	1.74	1.52	1.36	1.26
佐 賀 県	4.28	2.35	2.13	1.93	1.75	1.67	1.48
長 崎 県	4.49	2.72	2.33	1.87	1.70	1.57	1.45
熊 本 県	4.06	2.25	1.98	1.83	1.65	1.56	1.46
大 分 県	3.90	2.05	1.97	1.82	1.58	1.51	1.40
宮 崎 県	4.35	2.43	2.15	1.93	1.68	1.62	1.48
鹿 児 島 県	4.19	2.66	2.21	1.95	1.73	1.58	1.49

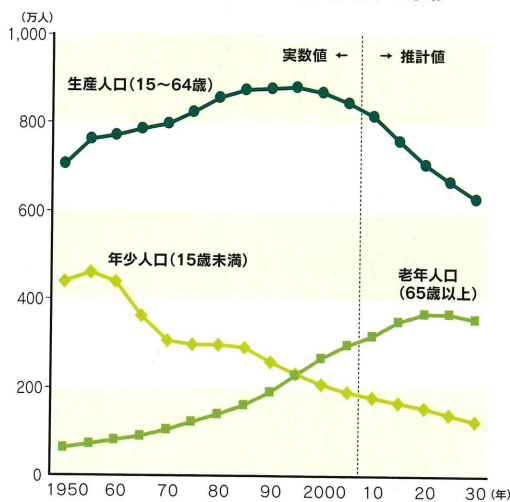
資料) 国立社会保障・人口問題研究所

〈図表1〉九州の人口の推移



資料) 総務省「国勢調査」、九州経済調査協会推計

〈図表3〉九州の年齢階層別人口の推移



資料) 総務省「国勢調査」、九州経済調査協会推計

◆65歳で高齢者なんてまだ若い

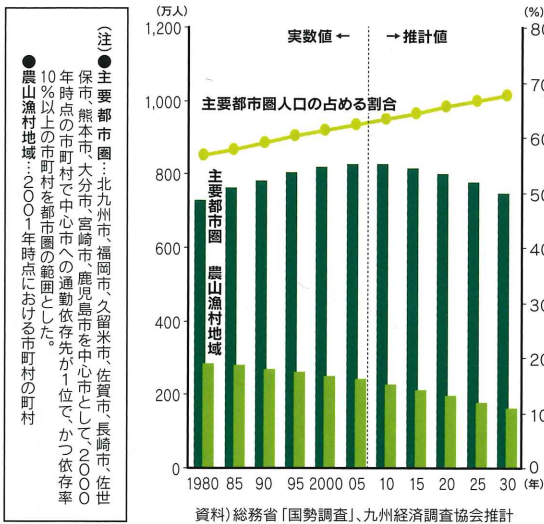
九州の100歳以上は3000人突破

長寿社会日本となったおかげで、高齢化も進んでいます。九州では、1950年にわずか62万人であった老年人口（65歳以上）が2005年には、298万人と約5倍に増えました。逆に年少人口（15歳未満）は441万人から190万人へと減少し、2000年には年少人口と老年人口が逆転しました。また、1995年以降は生産年齢人口（15～64歳）も減少に転じています。

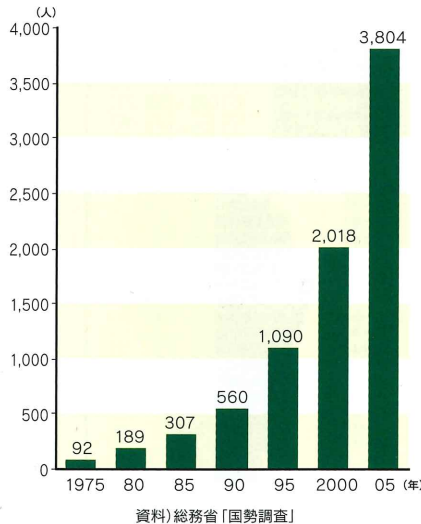
2030年には32.0%と総人口の3割以上が高齢者で占められ、超高齢化社会（※1）という言葉さえはるかにしのぐ社会になると予測されています。（図表3）



〈図表5〉九州の主要都市圏人口と農山漁村地域人口の推移



〈図表4〉九州の100歳以上人口の推移



また、九州における2005年の100歳以上の人口は、5年前からはほぼ倍増し、3,800人に達しました。(図表4)

◆農山漁村は人口減少が続き都市圏の人口は今がピーク

九州における主要都市圏(注参照)と農山漁村地域の人口の推移を見ると、主要都市圏では現在もなお人口は増加基調にあります。農山漁村地域では人口減少が進行しており、都市圏へ人口が集まってくると予測されています。

推計人口では、2010年以降になると主要都市圏においても人口は減少に転じると見込まれています。(図表5)

◆都市の高齢化 団塊世代は(※1)どう動く

九州の主要都市圏における年齢別人口構成比を2005年と20年後の2025年とで比較すると、人口が多い1940年代後半生まれの「団塊世代」と、70年代前半生まれの「団塊ジュニア世代」が歳を重ねることで、都市圏内部においても高齢化が進むと見込まれます。

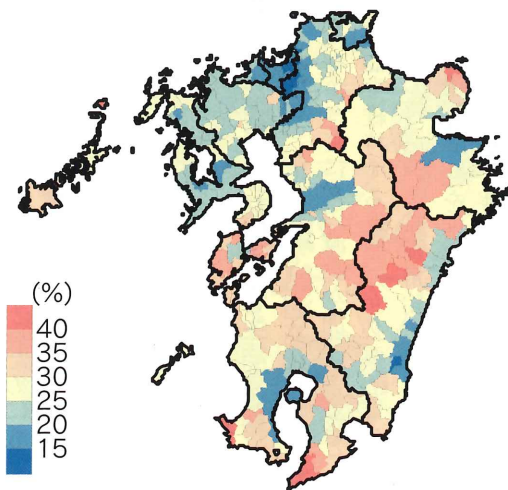
戦後、常に時代の変化の先駆けとなってきた「団塊世代」の動向が、これからの九州の将来にも大きな影響を与えそうです。(図表6)

◆高齢者が高齢者を支える農山漁村地域

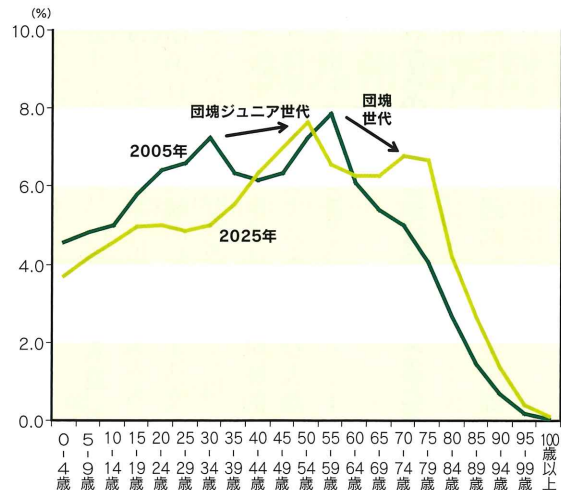
九州における2005年の65歳以上人口の割合をみると、九州中央部、南部の農山漁村地域で30%以上の自治体が多いことがわかります。

これらの地域は、今後はさらに高齢化が進むと予測され、元氣な高齢者が高齢者を支えていくという社会が農山漁村ではみられるでしょう。(図表7)

〈図表7〉九州の高齢化率分布図



〈図表6〉九州の主要都市圏の年齢別人口構成比



※1…P19「用語集」参照

九州の人口減少と少子高齢化の課題を探る

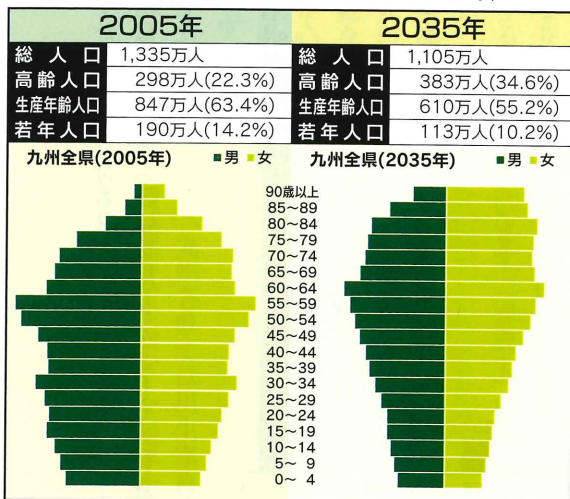
都市では高齢化、農山漁村では人口減少に対応

人口減少・少子高齢化にあつて、安全・安心で快適な暮らしを実現するためには、都市では高齢化、農山漁村では人口減少が、それぞれ主要な課題となるものと考えられます。

◆都市・高齢化の対応

都市においては、人口減少は緩やかですが、高齢化が進んでくることから、住民のコミュニティを維持する取組みや、中心市街地の活性化による都市機能の維持など高齢化対策のまちづく

〈図表8〉九州の人口（2005年と2035年）



資料)総務省「平成17年国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所推計

りがより強く求められると考えられます。

【中心都市・都市の「コンパクト化」】

中心市街地に立地していた公共施設の郊外移転や大規模商業施設の郊外立地で、都市が郊外に拡大してきました。人口減少・少子高齢化社会では、少ない財政で都市を維持し、人の移動上の負担を軽減しなければなりません。そのために主要な都市機能を一定地区に集中させるといった、コンパクトなまちづくりへの取組みが全国各地で行われています。

九州では、長崎市、熊本市、鹿児島市で路面電車が活用できるなど、コンパクトな都市づくりの素材は多くあります。

【都市郊外・ニュータウンの高齢者の暮らしやすさ】

1950~70年代に開発された都市郊外のニュータウンでは、高齢化が一気に進行しています。これらのニュータウンは、公共交通へのアクセスが不便なケースも多くみられます。

高齢化の進んだ北九州市八幡東区では、高齢者が坂のまちでも暮らしやすいように、コミュニティバスなどの公共交通の確保やボランティアによる古紙回収など生活共同体を維持する活動を行っている例もみられます。

【地方都市・中心市街地の空き店舗の活用】

人口減少や自家用車依存の社会で、地方都市では中心市街地の空洞化が生じ、商店街の空き店舗が目立ちます。周辺集落を含んだ生活中心都市としての機能を維持するためにも、中心市街地の活性化が必要です。

豊後高田市(大分県)では、元気だった昭和30年代の商店街の賑わいをよみがえらせようと、昭和の町づくりで中心市街地の活性化を図っています。

◆農山漁村地域・少ない人口で生活を維持する

農山漁村については、すでに超高齢化社会に入っており、今後さらに人口減少が加速することから、集落機能を維持する取組みが必要不可欠です。農山漁村の持つ食糧自給や国土保全という視点も今後、重要性を増すと考えられます。

人口減少による耕作放棄地の拡大、空家住宅、森林の荒廃、里山の保全、土砂災害等の自然災害、鳥獣被害の増加といった問題にも対応していかなければなりません。

社会サービス(教育、医療、上下水道、消防など)を維持するための担い手活動の取組みも必要です。農山漁村には、地域の伝統的生活文化や祭事が残っており、地域の資源として活用し、住民の自信と誇りをもたらす活動も積極的に行われるようになりました。そこに住む人たちの暮らしと文化を護ることも大切なことです。

◆これからの九州は地域間での交流と連携

九州約1300万人の人口は、30年後には福岡市や県庁所在地周辺部で人口の増加が見られるものの、多くの都市は人口減少すると予測されています。また、九州の大部分では人口減少が



加速し、特に九州中央の中山間地域での減少が大きくなつていくと予測されています。

これからは、全ての市町村が独自に都市的生活機能を維持するのではなく、複数の市町村が積極的に交流、連携して、都市的サービスや文化的サービスを互いに分担し合う地域構造にしていく必要があります。

人口減少・少子高齢化時代は、地域間競争の時代と言われていますが、都市と農山漁村の交流連携によって競争力を高めていかなければなりません。都市と農村をたやすく移動できる生活圏の仕組みをつくっていけば、都市と農村の一体化のなかで、快適な暮らしだけでなく、国土保全にも寄与できるものとなります。

地域が安全・安心で快適な暮らしをするためには、自らがその「地域力」を発揮していくことが大切です。

人・資源・経済 3つの地域力で勝負

本誌の今回のタイトルは、「地域力で勝負!」。人口減少・少子高齢化に地域が対応していくには、その地域にある「地域力」が必要となっていくものと考えます。「地域力」はその地域が持っている力、可能性、潜在能力であり、「人」「地域資源」「経済」の3つの力を表現できると考えます。

【地域力その1「人」の力】

(人材及び人と人とのつながりが力)
地域が活性化しているところには、本誌で今回

紹介する佐世保市四ヶ町商店街の竹本慶一さんのように、必ず人材がいます。鹿屋市柳谷、竹田市九重野などではキーパーソンが活躍しています。無論、キーパーソンだけではなく、地域の人たちの相互信頼関係やネットワークも重要となってきます。

【地域力その2「地域資源」の力】

(自然環境、歴史、文化、社会基盤)

私たちが暮らしている地域の資源というのは、結構見逃しがちです。ふと気付くとそこには魅力的な地域資源があります。豊かな森や海、温暖な気候、その地域をつくってきた歴史や風土、そしてその地域の文化。またその地域の社会基盤も大きな資源です。

「ないもの」ねだりより、「あるもの」探し。それが地域資源としての活用です。

今や全国的に人気の温泉地となった湯布院町(現由布市)では、平成2年に「潤いのある町づくり条例」として、「美しい自然環境、魅力ある景観、良好な生活環境は湯布院町のかげがえのない資産である。町民は、この資産を守り、活かし、より優れたものとする」とに永年のあいだ力をつくってきた。これを基本理念として定め、昔からの地域の自然環境や文化を湯布院の資源として活用し、活性化が図られています。

【地域力その3「経済」の力】

その地域が自立するためには生活基盤としての産業(農林漁業、工業、商業、観光等)が必要となってきます。特に農山漁村においては、これまでの産品や観光資源に一層の付加価値を高める工夫や取組みによって地場の自立基盤を強化していくことが大切です。

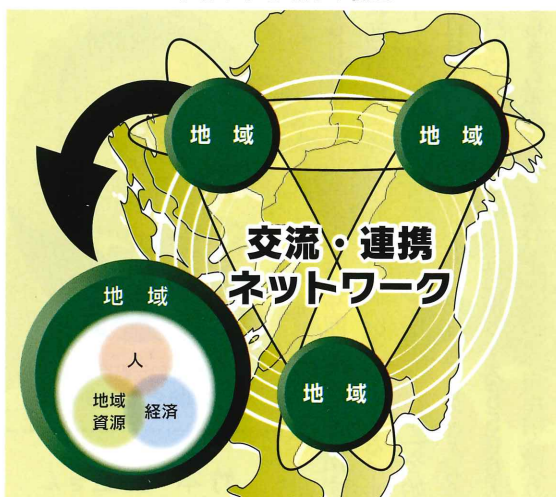
◆地域力を活かした取組み

3つの地域力を示しましたが、何よりも大切なのは、地域力を活かして、私たちが住む地域を私たち自身で安全・安心そして快適な暮らしが実現できる、魅力的な地域にしていきたいという意識なのかもしれません。

そして、地域力を活かした地域同士が交流・連携していく、それが九州の人口減少・少子高齢化に対応するひとつの道です。

取組みのヒントとして、中心都市である佐世保市におけるコンパクトなまちづくりや商店街の持つ社会的機能の向上、農山漁村である諸塚村における「地域」のことは地域で考えていく」という「自律」の姿を紹介します。

〈図表9〉地域力の概念



作成)九州地方計画協会



平日の佐世保商店街の人の通り

子どもからお年寄りまで、生活者に根ざしたまちづくりを実践

九州の多くの都市では、都心への買物客、通勤・通学者が減少し、それに伴い小売・サービス機能、オフィス機能、社会サービス機能等の低下が起きている。

そうしたなか、九州の主要都市でありながら従来の街の賑わいを維持し、子どもからお年寄りまで多くの人が集まっているのが、長崎県佐世保市の商店街である。なぜ佐世保市の街は賑わっているのか。させほ四ヶ町商店街協同組合理事長 竹本慶三さんに聞いた。



◆街が変わる 全長1kmのテープカット

「街が変わるきっかけとなったのは、危機感でした」と竹本さんは当時の状況を振り返る。1997年、佐世保市郊外に大型ショッピングセンターが進出し、商店街の買物客が減り始めた。長崎県北地域で確固たる地位を築いていた商店街の意識を変えるきっかけとなった。店主たちは、商店街内で売上げを競うのではなく、商店街一丸となって大型店に対抗する必要があると痛感したのである。

商店街がまず行ったのは、市民や商業者など、地域の一体感の創出であった。佐世保市中心部の四ヶ町商店街、三ヶ町商店街、老舗百貨店「玉屋」が連携し、「さらくシティ403アーケード」という名前をつけた。

地域内外の注目を集めたのは、アーケード命名式での全長1kmのテープカットだった。注目されたのは、その長さだけではない。テープカットする参加者が、大勢の市民だったことである。「西日本一長い商店街と言われる佐世保ならではのテープカットでした。テープカットをしたことがない子どもは大喜び。2〜3万円しかかかっている、たかがテープカットですが、これが市民と商店街の一体感を高めたのです」。

◆街の賑わいの源は「人」

「こんなにたくさんさんのイベント、よくやりますね、と言われます。結局のところ好きだからやっているだけなんですけど(笑)」竹本さんは笑う。商店街では、人を呼び込むイベントを多く実施している。



させほ四ヶ町商店街協同組合 理事長

竹本 慶三さん

1996年より、賑やかな雰囲気を作り出すために商店街全体を100万個の電球によるイルミネーションで飾る「きらきらフェスティバル」を始め、11月中旬から約5週間行われるきらきらフェスティバルでは、アーケードを会場とする5500人の「きらきらチャリティ大パティイ」、市民で歌う欲の歌」など、様々なイベントが実施される。

また、「きらきらフェスティバル」から2年遅れで始まった「YOSAKOIさせほ祭り」は、「きらフェス」などを企画した定例会合(朝会議)で、札幌で行われていた「YOSAKOI」のビデオを観たことがきっかけで生まれたものである。当初、参加団体数は6団体であったが、現在では148団体となり、佐世保市外からの参加団体は100団体を超えた。この祭りの経済効果は20億円、27万人の人が訪れるイベントに成長している。

これらのイベントや取組みの成功の裏には、「市民の参加」がある。例えば、「きらフェス」開催中に飾られるイルミネーションの電球の一部は、市民からの協賛金が充てられている。「YOSAKOIさせほ祭り」のイベントスタッフも、市民や県内外



の大学生などによるボランティアが支えている。「さるくシティ403アーケード」のテープカットも主役は参加した多くの市民だったように、単にイベントに訪れるだけでなく、参加しているという意識を高めることで、街への愛着がわき、街に賑わいをもたらしているのである。賑わいを演出する主役はそこに住む「人」なのである。

◆お年寄りにもやさしいザロンのような場所

「商店街が相手にするのは、消費者ではなく『生活者』。単なる買物の場ではなく、生活に根ざした街にしなければ。」竹本さんは言う。佐世保の商店街に訪れる人のなかには、商店街をあたかも『生活の場の一部』のように利用する人も多い。例えば、竹本さんの店「バッグショップタケモト」では、バッグを買うつもりがなくてもやつてきて、お茶を飲んで帰るといった年配客が少なくない。なかには食事までして帰る客までおり、商店街がお年寄りにやさしく、居心地の良い場であるのかがうかがえる。

竹本さんは、商店街をサロンに例える。

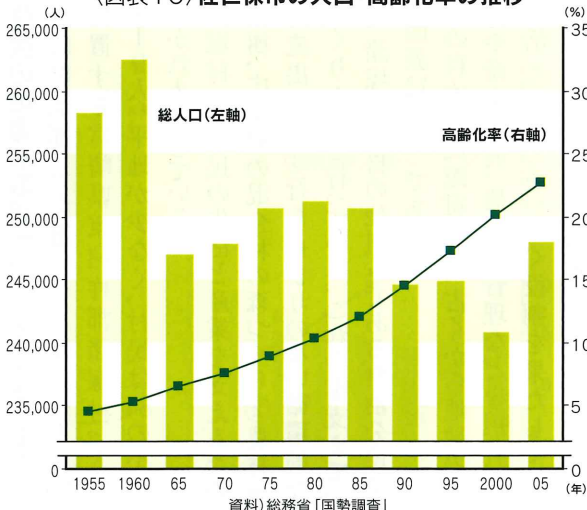
「商店街は、お客さんどうしの顔がみえて、いつでも立ち寄れるサロンのような場所なのです」。

◆子ども連れも立ち寄りやすい

“生活者視点”の商店街

また、商店街では、乳幼児を連れ親子でも商店街に気軽に訪れてほしいという思いから、「親子広場よんぶらこ」というコミュニティスペースを開設した。「親子のスペースを作るなら、絶

〈図表10〉佐世保市の人口・高齢化率の推移



対にまちなかが便利。そういうスペースがほしいという声も多かったし、子育て支援をやりたいたいというNPOも手を挙げたので、だったら商店街が場所を提供するしかないと思えました。結果は大当たりで、年間4000人以上が利用していますよ。」竹本さんは言う。

買物途中の休憩や授乳スペースとしてだけでなく、子育て中の母親どうしや子どもどうし交流が行なわれ、また、栄養士などによる相談の場としても活用されている。

そのほかにも、商店街の中にコミュニティFM「はっぴいFM」を開設し、毎日、生活者に根ざした情報を発信するといった試みも行われている。

◆市民がインフラを活用して
暮らしやすい空間にする

佐世保の中心市街地は、病院や公共施設、公共交通機関へのアクセスが良く、市民が住みやすく訪れやすい基盤が整っている。商店街が中心となり、お年寄りや子育て世代をはじめとする『生活者』が利用しやすく、くつろげるまちづくりの実践が加わった。これらの複合的な機能が備わることで、商う人と買い物をする人が交わる空間である「コンパクトなまち」を形成しているのである。

竹本さんは言う。「街が人を育て、人が街を育てる。人は街で様々なものを学び、人の気持ちや意識が街を良くするのだと思います」。



商店街で安心して買物ができる「親子広場よんぶらこ」

〈図表11〉諸塚村自治公民館組織図



資料) 諸塚村より

住民の “自治力”と交流で 地域を豊かに

農山漁村の人口減少・少子高齢化による限界集落問題が叫ばれるなか、諸塚村では、住民が主体となった地道な自治活動により、集落生活の維持と、交流人口拡大による地域活性化を実現している。成功の秘訣を、諸塚村企画課長の矢房孝広さんに聞いた。



◆住民の地道な取組がセーフティネットに

宮城県北部、日向灘に注ぐ耳川の上流50kmに位置する宮城県東白杵郡諸塚村。人口は2119人。平地が少なく、村民は84の小集落に分かれ生活している。

諸塚村は、住民の生活と産業を支えるため①針葉樹、広葉樹の混合林の森づくり②農林地の村外流出防止③行き止まりのない循環的な林道づくりなどを行っている。これらを支えているのが、諸塚村独自の仕組みである自治公民館組織(図表11参照)である。

この自治公民館組織は、古くから地域の社会教育や産業振興、農林地管理などを担い、住民の生活と行政とをつなぐ役割を果たしている。集落が点在するので、林道は生活道を兼ねており、その維持管理作業は集落生活に不可欠なものであり、林道の草刈りや清掃などが自治公民館組織の全てで行われている。

地道な管理活動は、普段の生活を支えるだけでなく、防災面でも力を発揮している。2005年に諸塚村を襲った豪雨の時、家屋の損壊などが多発したが、林道の適切な管理のおかげで集落が孤立することなく、短時間で復旧できたため、人的被害を出さなかった。まさに、住民の自治力がセーフティネットとなったことの証である。

◆「人と自然」が産業の基盤

自治公民館組織による山林・林道管理は、地域産業活性化の基盤ともなっている。



諸塚村企画課長

矢房 孝広さん

諸塚村は、農耕地の割合が総面積の1%に満たず、村の産業に占める林業の依存度は極めて高いが、近年は海外からの木材やしいたけの輸入増加から、村の基幹産業の低迷を招く事態が生じている。そこで諸塚村では、木材の価格低迷や市況変動の影響を緩和するため、独自の木材流通経路の開拓に乗り出した。その取組みが、家の建主と生産者が交流することで、木材の直接取引を促進する「産直住宅プロジェクト」である。「単に優良な木材を供給するだけでなく、諸塚村の良さを理解してもらった上で、家を建ててほしいからです。」矢房さんは語る。

そうした想いを実践するため、産直住宅プロジェクトでは、「木材産地ツアー」を実施している。建主や工務店を対象に、伐採などの山作業をみてもらうというツアーである。ツアーでは、山や木材に関するセミナーに加え、地域の祭りへの参加等も盛り込まれている点がおもしろい。「人との交わりが大切。ただ家を建てるだけでなく、どれだけ品質管理の努力をしているか、どんな人たちが良い木を育てているのか、それを感じてほしいんです。」矢房さんは話す。

こうした良質な木材供給を支えているのも、



また日々の山林・林道管理である。建主が木の生育環境や山作業を安全に見学できるのも、安全な林道が維持されているからにほかならない。

◆エコツアーは住民が主役

また諸塚村では、建主等を対象とする「木材産地ツアー」に加え、地域の資源を活かしたエコツアーを実施している。

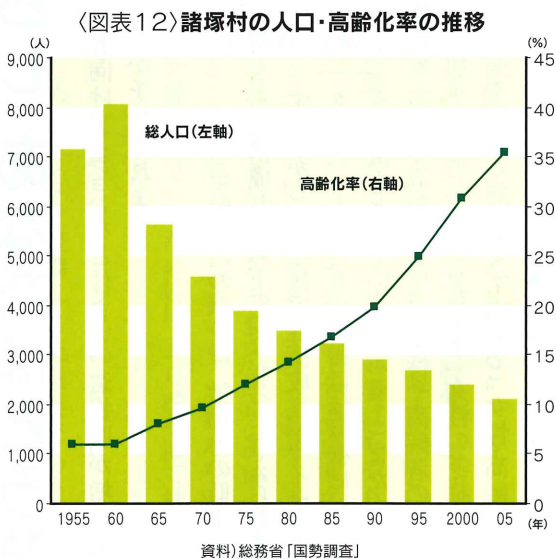
エコツアーは、自然環境に配慮しながら、地域資源を活かし、住民が村外の人と無理なく交流することをコンセプトとしている。そば蒔き、山菜採り、山茶摘み、春祭り体験など、村の昔からの生活や風習を使った体験メニューを企画し、古民家を改装した宿泊・交流施設を拠点に行われている。宮崎県内だけでなく、県外からの参加もあり、参加人数はツアー開始の平成10年から約130回で延べ約3000人に達している。参加者のリピーター率は約6割に上っており、参加者の満足度は非常に高い。体験ツアーのインストラクターは全て地域の住民が担当し、受け入れは自治公民館組織が主体となっている。「はじめは『普段やつているこんなことでお金をもらうなんて』という方が多いですね(笑)。でもツアーの参加者が喜んでくれて、ほめてもらうことで、インストラクターの自信や生きがいにもなります」。

◆住民の自信が地域に誇りをもたらす

諸塚村では、自治公民館組織という強固なコミュニティによる地道な活動が、集落の生活を支え、さらに地域産業活性化の基盤ともなっている。

一方で、少子高齢化や限界集落の問題については、他の地域と同様、悩みを抱えていることも確かである。現に平成17年の諸塚村の高齢化率は5年で約5ポイント高まり(35.3%)、人口は10%以上減少している(総務省「平成17年国勢調査」)。諸塚村では、「地域の誇り」を高めることで、そうした問題に向き合おうとしている。

矢房さんは、最後にこう語った。「私たちが行うエコツアーなどの交流事業は、お金を稼ぐことが目的ではないのです。近代化した都市の方から、むしろ自分たちの暮らしを評価してもらい、山村で働き、生きることの誇りを持ってほしい。村に戻ってきたい、村で働きたいと思う人を増やすことが、私たちの取組みの目的なのです」。



体験交流事業で、昔の諸塚の暮らしを体験してもらう。梅干調座(左)と山茶の釜入れ(右)

変わる私たちの暮らし あなたはどう暮らしたいですか？

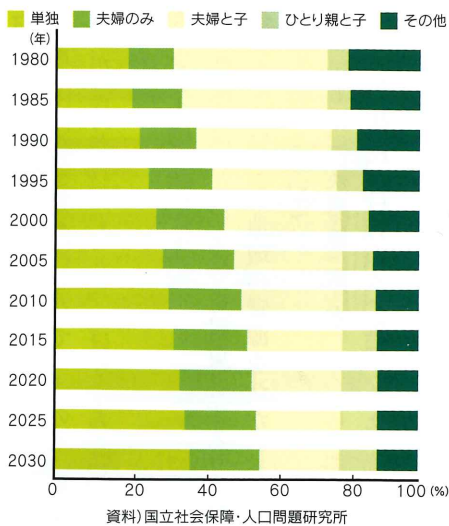
人口減少や少子高齢化に対して、地域としての取組みをみてきました。ここでは、KShip創刊号で考えた4つの暮らしの視点、(住む・癒す)、(働く・費やす)、(遊ぶ・交わる)、(育てる・学ぶ)から、人口減少や少子高齢化によって、私たちの暮らしがどのように変わるかをみていきます。

【住む・癒す】

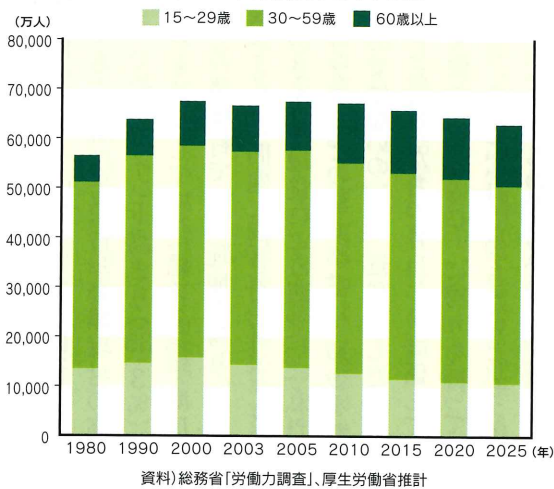
家族構成は世帯人数の縮小とともに、高齢者単独世帯数が増加し、小規模世帯が過半数を占めるようになると予測されています。居住空間については、人口減少により床面積が増加し、ゆとりある空間になりそうです。

高齢者単独世帯は確実に増加することとなりますが、高齢者の住まいは一戸建や都市の高

〈図表13〉家族類型別割合の推移



〈図表14〉労働力人口の推移



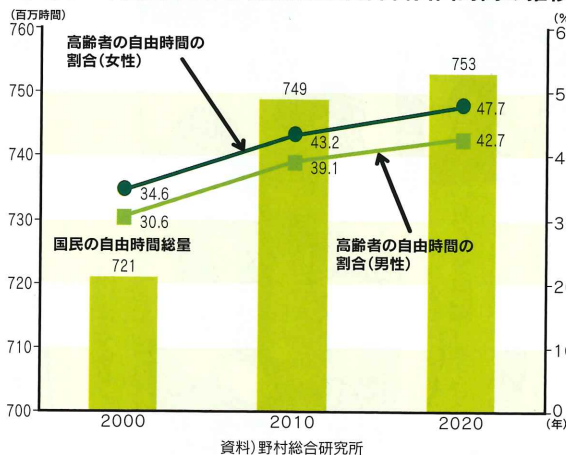
※1 日本経済新聞社「人口減少社会の新しい公式」(松谷明彦著)より

【働く・費やす】

生産年齢人口の減少は、労働力の低下から経済成長の低下につながると考えられます。しかし、国全体で経済成長がマイナスでも国民一人当たりの所得はほぼ横ばいという予測もされています。(※1)また、人口減少や高齢化の中で、女性や高齢者の就業が増加するものと考えられます。女性の多様な就業形態や定年年齢の引き上げなど、女性・高齢者が働きやすい環境づくりが進むこととなるでしょう。

高齢者向けマンションなど住まいの選択肢が増えることが予想されます。

〈図表15〉国民の自由時間総量と高齢者自由時間の推移



注: 国民の自由時間総量とは、自由時間×人口であり、人口減少時代でも国民の自由時間総量は増加すると予測されている。高齢者(60歳以上)の占める割合も高齢化と共に増加する。

【遊ぶ・交わる】

人口減少はマーケットの縮小に直結しますが、一律に縮小するのではなく、シルバーマーケットなど、拡大する市場も出てくるでしょう。新たな人口構成に対応した商品・サービスが提供されるのが予想されます。

労働条件は余暇時間の増加が見込まれており、さらに高齢者の増加によりゆつくりな生活空間やレジャー産業が求められます。

団塊世代を始めとする多様な価値観を持つ高齢者が増えることで、都心での



農業や、ITを使った中山間地からの情報発信などが行われているでしょう。

都市と農村の交流は一般化し、「週末住民」や夏や冬の「季節だけ住民」といった二地域居住を楽しむ人が多く出てきそうです。

【育てる・学ぶ】

多様な就労形態に対応した環境整備が進むなか、各地で子育て世代を支援する仕組みも整うこととなるでしょう。また、生涯教育活動が活発となり、それが高齢者の社会参加にも寄与することとなります。

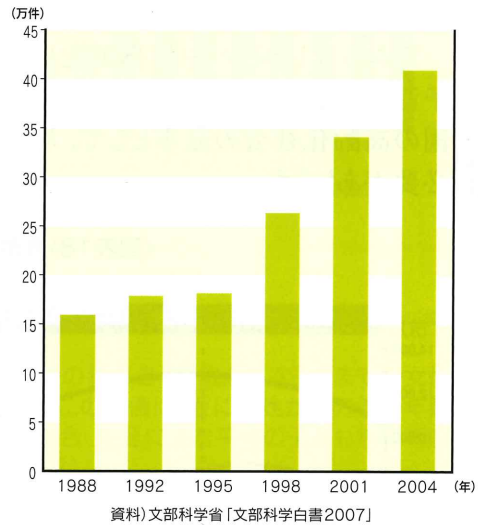
インフラを活用して近未来へ進む

(社)九州地方計画協会は、社会資本整備を通じて社会貢献を目指しています。人口減少・少子高齢化の中で、都市、農山漁村がより安全・安心で快適な暮らしを実現するためには、暮らしとインフラをどのような視点で考える必要があるのでしょうか。

人口減少・少子高齢化は、財政が逼迫するなかで迎えた。新しいものを作るだけでなく、既存インフラの有効活用と維持管理を行うことや都市のコンパクト化が必要であり、安全・安心確保のための防災やコミュニティの維持が重要とされます。

昨年、アメリカ合衆国ミネソタ州ミネアポリスの橋梁が老朽化により落橋し、13名の犠牲者を出したという事故がありました。将来にわたって、道路、橋梁、防災施設等を適切に維持・管理し、長

〈図表16〉生涯教育 学級・講座の実施状況推移



持ちさせ、かつ有効活用することも必要です。

公共施設等を集約してコンパクトなまちづくりを目指すという視点は、都市経営上のコスト面ばかりでなく、中心市街地の再生、活性化とともに、高齢者が歩いて暮らせる、環境にもやさしいまちづくりとして推進されようとしています。

コミュニティの維持は極めて大切であり、中心市街地の都市機能の向上や出会い、語らいの場、情報機能としての商店街も必要です。これからの農山漁村を維持していくためには、あらゆる面で地域コミュニティの維持が重要となってくると思われれます。

豪雨が頻繁に発生する近年、安全・安心に暮らすためのインフラ整備もまた重要であり、ハードだけでなく自助、共助、公助といったソフト対

◎ワン・ポイント・インフラ 「公共とは…」

公共とは、広辞苑で“社会一般、おおよげ”とあり、また「公共性」という意味で“広く社会一般に利害を有する性質”とされています。では、何故公共という概念が生まれてきたのでしょうか？

ひとりではできない。そこで共同して行おうとする。それがみんなの利益となる。それが公共の利益です。公共の利益というものは、必ずしも全員の利益とはなりません。結果として広く利益がもたらされなくてはなりません。

公共の中で「公共事業」とは、公共の利益に資するための事業です。そのた

めに、広域的、長期的な視野を持つて計画され、利活用され、そして住民の満足度が高まるものでなければなりません。

日本では、「公＝お上」と、行政、国というイメージですが、欧米諸国では、「公＝Public」という言葉で表現され、みんなのものといった意味合いが強くなります。近年では、国土交通省で新しい「公」という言葉が使われるようになり、住民、地域団体、NPO、企業、自治体等の官民の多様な主体が協働していくという姿が見られます。

策も必要とされます。

農山漁村には、都市にない食・水・自然エネルギーによる自給の可能性があります。また、都市への供給源にもなります。そういう面での自立としての価値はこれから見直され、必要となる水資源管理や自然エネルギー資源に対するインフラも必要とされます。

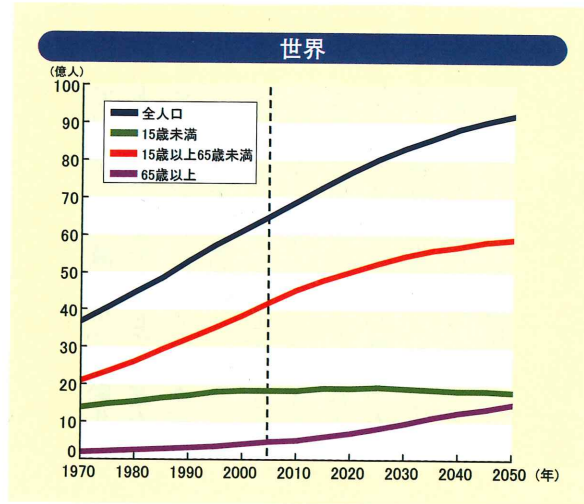
データ集 グローバル化の中の九州



アジアに向けて 九州は高齢化社会の 見本となる

国内の人口減少を考えた場合の私たちの暮らしへの影響を考えてきましたが、世界に目を向けると2005年の地球人口約60億人は2050年には約90億人に増加すると予測されています。

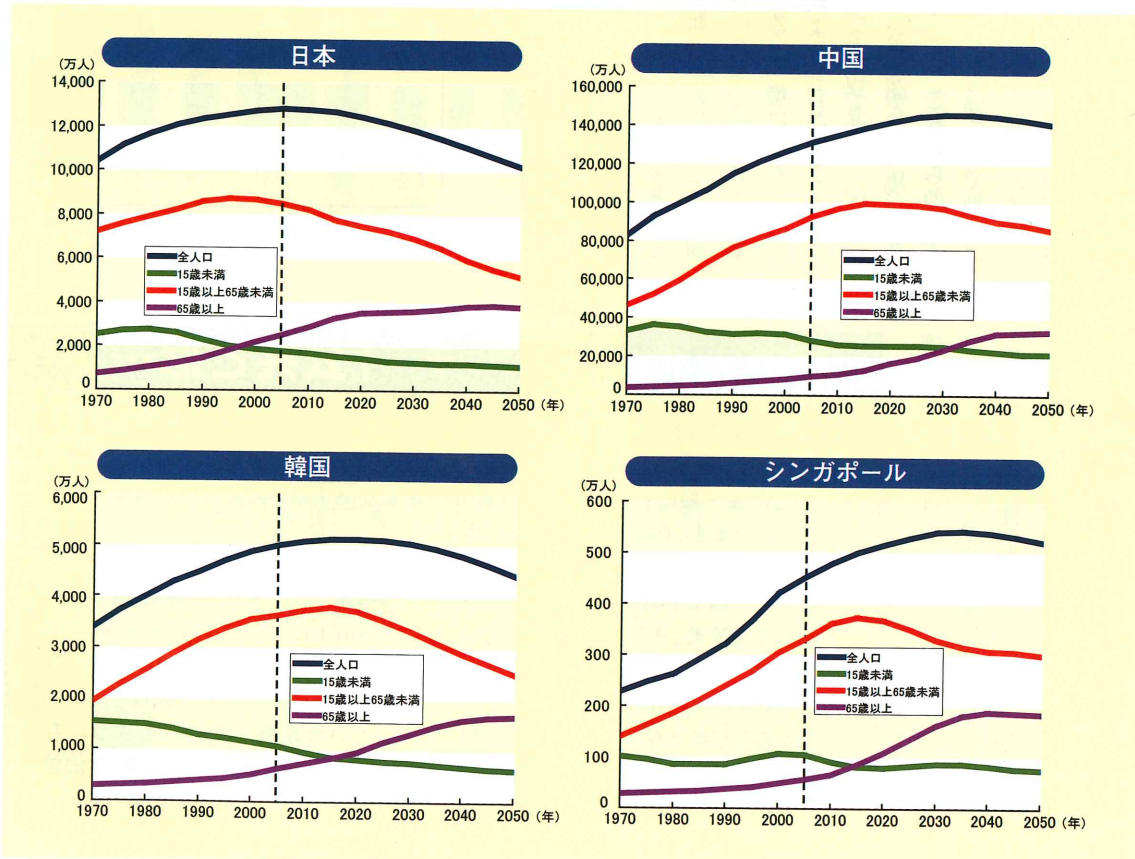
〈図表17〉増加する世界の人口予測



資料: World Population Prospects 2006 Revision

日本の人口減少・少子高齢化は世界に先行しています。中国、韓国、シンガポールの人口予測をみると、急激に少子高齢化が進み、次第に人口減少時代になります。日本はアジア諸国の高齢化社会の見本として、九州からアジアに向けて高齢化対応の情報発信をしていく必要があります。

〈図表18〉高齢化が進むアジア諸国の人口予測

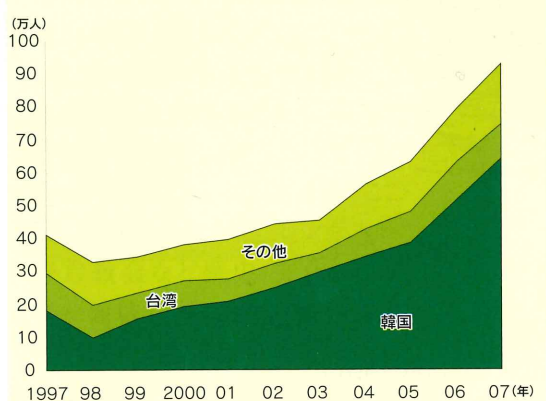


資料: World Population Prospects 2006 Revision

交流・連携もグローバル化へ

地域再生として交流人口の拡大を目指す地域が多くあります。九州・山口の入国外国人数をみると、韓国からの入国者の増加が目立ちます。

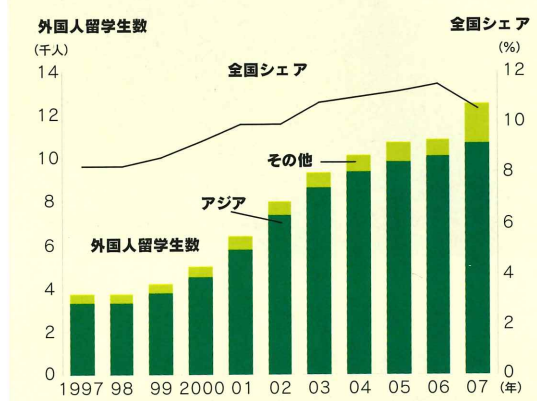
〈図表19〉入国外国人数の推移(九州・山口県)



資料:法務省「出入国管理統計年報」、九州経済調査協会作成

九州の外国人留学生は、1万人を超えています。人口当たりの留学生数は、大分県(2位)と福岡県(4位)は全国でも有数の留学生の多い県です。

〈図表20〉外国人留学生数の推移(九州8県)



資料:文部科学省、各県調べ、九州経済調査協会作成

用語集

合計特殊出生率 合計特殊出生率(期間合計特殊出生率)とは、その年次の15歳から49歳までの女性の年齢別出生率を合計したものと定義される。この数値は、仮に女性がこの年の年齢別出生率にしたがって子どもを生んでいった場合、生涯に生む平均の子ども数に相当する。(厚生労働省「厚生労働白書(平成19年度)」)

平均寿命(平均余命) 平均余命とは、ある年齢に達した集団が、それ以後生存し得る平均年齢を、国勢調査による年齢別死亡率から統計的に算出したもの。0歳における平均余命を平均寿命という。(岩波書店「広辞苑」)厚生労働省「平成19年簡易生命表」によると、平均寿命は、男79.19年、女85.99年である。

高齢化社会 一般に、高齢化率(65歳以上人の人口が総人口に占める割合)が7%を超えた社会を「高齢化社会」、14%を超えた社会を「高齢社会」と呼んでいる。なお、今後到来が予想される高齢化率の一段と高い社会を「超高齢化社会」と呼ぶことがあるが、特に明確な定義があるわけではない。(内閣府「高齢社会白書(平成17年度)」)「超高齢化社会」は高齢化率21%以上を超えた社会と考えることが多い。

団塊世代 (他世代に比し人数が特に多いところからいう)1947～49年のベビー・ブーム時代に生れた世代。(岩波書店「広辞苑」)なお、その子の世代は団塊ジュニアと呼ばれる。

限界集落 65歳以上の高齢者が集落人口の半数を超え、冠婚葬祭をはじめ田役、道役などの社会的共同生活の維持が困難な状況に置かれている集落。(大野晃「現代山村の諸相と再生への展望」(日本村落研究学会編『年報村落社会研究34・山村再生21世紀への課題と展望』農山漁村文化協会)1998年)

※本誌のデータの詳細や用語集など人口減少・少子高齢化に関するデータは、(社)九州地方計画協会のホームページ(<http://www.k-keikaku.or.jp/>)に掲載しております。

◎福岡市 東区

名島橋 75歳

誕生以来、住民の夢や
誇りを架ける



「自動車の時代が来る。道は東京につながる幹線、りっぱな橋を作りたい」「地震に強くなきゃ」「新潟・信濃川の万代橋に負けられん」「目標はヨーロッパの石橋じゃ」「石橋なら九州たい、石工はいっぱいおる」

「今にも足を踏み外しそうな木造橋」(出席者談)の近くで、今風に言えば官民協働でこんな「気宇壮大な」(同)意見が交わされた…時は昭和の初め、所は多々良村(現福岡市東区)の村長宅。夢は実現した。幅24m、長さ204mの御影石七連アーチ型の名島橋が完成したのは昭和8年3月だった。

「飛行場みたいじゃ」と地元民が驚くほど大きく、美しかった。現在は片側3車線1日平均約65,000台という幹線だが、完成時は2車線、それでも車はまばら。子どもたちの遊び場にもなった。やや上流の鉄道橋が交通の主役であり、戦時中は防災上黒く塗られ、戦後は長く忘れかけていた。

にわかに脚光を浴びたのは、平成6年。人間で言えば還暦のときだった。架け替え案も浮上するなか調査が行われ「100年は大丈夫」。福岡国道工事事務所は橋の化粧直しをし、往時の美しさが蘇った。架橋60周年記念誌やシンポジウム、記念グッズと多彩な顕彰活動を展開した。これに呼応したのが地元の商工連合会。名島橋サクス

フェアと一緒に開いて祝い、橋の清掃や一帯の植栽などに取り組んだ。

活動は、住民を巻き込んだボランティア組織「名島校区花の架け橋実行委員会」に発展し、現在も毎年のフェアや毎月の橋清掃が続く。会長の佐伯毅さん(64)は「通るだけだと橋の美しさに気付かなかった。私たち住民自身、郷土の歴史や誇りを忘れかけていた」という。橋を守り、道を守る一方、地元の歴史を掘り起こし、飛行場があったことにちなんだ紙飛行機大会を開くなど子どもたちに伝える活動にも取り組んでいる。

名島橋はいま75歳。戦中戦後の空白はあったが、名島橋は誕生のときから住民たちの夢や思いが寄せられた橋。「ええ、喜寿も米寿も祝いたいですね」と佐伯さん。

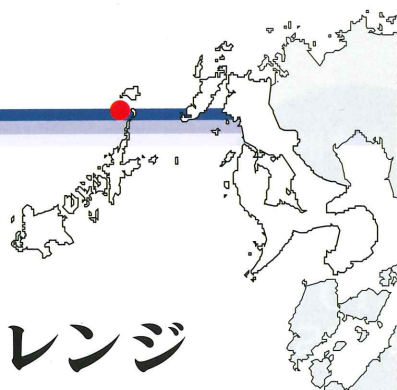
(原田真紀)



佐伯 毅さん



名島橋の清掃



◎長崎県 小値賀町

西海の島で資源を見つけ、 人材を得て地域再生へチャレンジ

佐世保からフェリーで2時間半、長崎県小値賀町は人口3,000人程度のいくつかの島からなる町であり、中世から中国貿易の要所として栄えた。かつて11,000人近くいた島の人口は1/3以下に減少し、特に2番目に大きい野崎島は、650人近くいた住民がいなくなり無人島となった。

「電気が通り、生活の便利さを満たすためには現金収入が必要となる。自給自足の生活が壊れた。」そう言って、人々は島から離れていった。しかし、ここには、島の豊かな自然、レンガ造りの野首教会など歴史・文化という貴重な地域資源が残った。教会のステンドグラスから漏れる光は小値賀の歴史と文化を映しているようだ。

ここを拠点に自然体験を中心としたエコツーリズムが平成10年に始められ、年間6,000人が利用するまでになった。日本の小中学生やアメリカの高校生もが自然体験や民泊による島の暮らし体験にやってくる。



その核となっているのが、NPO法人おぢかアイランドツーリズム協会である。中心となって活躍するのが、大阪出身で元劇団員という異色の経歴を持つ高砂樹史さん(42歳)だ。小値賀町の大いなる自然と島民のあたたかさに魅了され、ここ小値賀町に定住した。「観光という産業を通じて小値賀町の活性化に貢献したい」という。お

ぢかアイランドツーリズム協会は、外部の人材を取り入れ、地元の就職の受け皿として常時9人のスタッフを抱えるまでになった。

体験学習に来たアメリカの高校生に老婦が手振りでやさしくだんご作りを教えた。言葉を越えた国際交流で、島の生活を、日本の地方の古い文化を知ってもらった。そして、それが自分たちの自信となった。お土産品が見当たらない港の売店。しかし、物ではなく心のお土産をたくさんもらった。歴史漂う小値賀町は、おだやかで、マイペースで、そして誇り高い島だった。

K-Ship
とは

“九州の安全・安心で快適な暮らしの実現”のために、九州号(K-Ship)として、**Kyushu**(九州)、**Style**(らしさ)、**Happiness**(幸せ)
Infrastructure(社会資本)、**Public**(利用者)の情報を発信していきます。
[年2回発行予定]



編集後記

中山間地の人口減少は深刻です。今年は、限界集落という言葉が紙面をにぎわすことが多かった年でもありましたが、そんな限界集落という言葉に反発し、宮崎県では「いきいき集落」という名称を発表しました。

九州においては、特に九州山地の中山間地域に限界集落と呼ばれている集落が多くあります。そんな中で集落移転という方法が考えられています。今回取材した諸塚村のお隣の北郷村(現美郷町)では、かつて集落の一軒一軒に移転の希望を募り、希望者には村の中心部や集落の中心部に移転してもらったことがありま

した。多くの人は自分が住んでいるところをなかなか離れることはできません。一方、やむを得ず移転してきた人は、その生活に満足しているようです。

国土の保全としての中山間地のあり方、これからの食、水、エネルギーの供給の場としての中山間地の存在、生活の価値観が多様化していく中でどのようにすれば安全安心で快適な暮らしが実現できるのか。人口問題は環境問題とも大きく関係してきます。私たちは、今後も暮らしの中からインフラを考えていきます。

本誌に対するご意見を
お聞かせ下さい。



〒812-0011 福岡市博多区博多駅前1丁目19番3号

TEL:092-473-1057 FAX:092-434-4389 e-mail k-ship@k-keikaku.or.jp



長崎県北松浦郡小値賀町 野首教会
日本最古のレンガ造り教会(長崎県重要文化財)



社団法人 九州地方計画協会